
パラレルワールド

yoshina

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パラレルワールド

【Nコード】

N1251G

【作者名】

yoshina

【あらすじ】

園子の短め独白調。蘭との関係とかそついった感じで。短編集「Withacrine」の『戦う女子高生』と少しリンクしてるかもしれません。

女らしく、可愛くなりたいとは思っているが、蘭のようになりたいと願うことは一度も無かった。

園子は自分以外いなくなつた教室で、そんなことを振り返る。

休日が試合だったため、テニス部は休みだ。

しかし蘭の属する空手部は今日も練習があるので、園子はそれが終わるまで教室で宿題をしたり本を読んだりしていた。

賑やかな場も大好きだが、こういつた偶の一人も嫌いじゃない。英語のライティングの宿題を解きながら、シャーペンを器用にくると回す。

教室の真下にあるグラウンドでは、空手部が体力づくりのためのランニングをしている。

その先頭にいるのは主将の蘭だ。

よく通る声で掛け声をし、後方の部員達が元気良くそれに続いた。窓を乗り越えて入ってくる掛け声を耳に、園子の思考は進んでいく。

きっかけは、机に広げた教科書の例文。

「I wish I would have been prettier……」

もっと可愛かったらよかったのに。

簡単に訳せばそんなところだろう。

この例文を読んだ時、園子はいつも自分が思っていることだと感じたのだ。

もっと可愛かったら、もっと女らしかったら。もっと、もっと。

その理想は、まるで天使の笑顔を持つ幼馴染のように。

——本当に？

自然な流れで来た筈の思考は、ここでストップをかける。

何となく、「女性」の代名詞と言っても過言では無い幼馴染を脳裏によぎらせたが、本当に自分は彼女を理想としているのだろうか。

がたん、と椅子の前方を浮かせ後ろに体重をかける。

行儀悪く椅子をこぎながら、園子は腕を組んだ。

確かに、毛利蘭と言う少女はとても魅力的だ。

誰が見たってそうだ。

あんなに可愛い人見たことが無い、なんて言う男子生徒を何人も見てきたし、大多数の女子生徒も蘭のことを慕っている。

勿論自分だって蘭のことは大好きだ。

断言できる。

一生友達でいる気満々である。

だが、齢十七になる今まで、彼女のようになりたいと思ったことは無いような気がするのだ。

自分でも意外な事実、園子は首をかしげる。

何故自分はあれだけ素敵な女性を理想としないのだろうか。

幼馴染だから、近すぎる関係だから、とは少し違々と彼女は思う。

「帝丹ー！」

「ファイオーツファイオーツ」

グラウンド一周して、また園子のいる教室の下を空手部が通り過ぎていく。

漕いでいた椅子を床に落ち着かせ、立ち上がる。

そして窓から胴着姿の集団を見下ろした。

先頭を走る、髪を頭上でくくった少女。

遠目にしか見えないが、きつと走る姿はきらきらとしているのだろつ。

その汗すらも、他の人間から見れば光っているに違いない。

そんな可憐な彼女が先週、とある詐欺者を捕まえた”らしい”のを思い出す。

以前、噂で空手部の一年が強引な胡散臭い勧誘に引かかったというのを聞いた。

すると、またひっそりと噂でその犯人が捕まったと耳にした。

園子は直感的に、自分の幼馴染が関わっているのではないかと思つた。

なぜなら、蘭は自分の周りで起こる「悲しみ」を無視できない人種だからだ。

あまり噂が大きくなっていないことからすると、もう一人の幼馴染である高校生探偵は関わっていないだろう。

彼が絡んだ時点で、本人の意思に関係なく周囲が話を広めるからだ。

ある昼食時間にさりげなく、園子は蘭に問いかけてみた。

「もしかして、何かした？」と。

だが蘭はつかみどころの無い微笑を返しただけ。

その笑みは、いつも見る花が咲くような朗らかな笑顔とは、まったく別のものだった。

園子は驚いたが、違和感は無かった。

むしろ、そういった笑みのほうがよく似合うと気付いた。

聖女が罪びとに、と言えがいいのだろうか。

とにかく、彼女のそれは、違う世界から違う生き物への慈しみみたいだった。

「……ああ、そうか」

園子は不意に理解した。

何故、蘭のようになりたいと願わないのか。

それは、自分達の住む世界が別々だからだ。

彼女は、自分とはまた違う世界に生きている。

そしてそこから違うものを見ている。

他人には想像だにできない慈愛を傾けて。

だから、蘭を理想にしたところで、己が己に望む姿には一生重なることは無いのだ。

「まるで平行世界ね」

開かれた窓に肘をつけ、園子は頬杖をしてグラウンドを見渡した。多分自分は、あの部員達のように後ろをついて走るのではなく、横で一緒に進んでいくのだと思う。

その方向は決して交わることは無いけれど、それはさして問題じゃない。

ずっと平行に並んで、走ればいいのだから。

「帝丹ー！」

「ファイオーツファイオーツ」

——私なら、ファイオーなんて言わないわ

平行世界で走る幼馴染に向かって、園子は「帝丹ー」と小声で呟

い
て
み
た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1251g/>

パラレルワールド

2010年10月28日00時49分発行